

編集の序

「胆膵の新しい参考書を作りませんか？」2019年6月 日本国内視鏡学会総会での講演終了後、会場ロビーで安堵しているところに羊土社の鈴木美奈子女史に声をかけていただいたことが本書プロジェクトのはじまりであった。

お話を聞きすると、本学会で著者の講演「胆管挿管にどう挑むか、どのように乳頭と対峙すべきか」、「ERCP、EUS下ドレナージにおける被ばくの現状と被ばく低減への取り組み」の2つを聴講され、新しい切り口の参考書を作れる可能性を感じていただいたとのことであった。常日頃よりどうやったら上手く伝えられるだろうかと自問自答し、悩みながらも、伝わったときの喜び、嬉しさを求めて内視鏡教育に取り組んできた身としては大変ありがたいお話をあり、心の中ではすぐにでもやらせていただきたいと強く思ったことを今でも思い出す。しかし、羊土社からは糸井隆夫先生編集の「胆膵内視鏡の診断・治療の基本手技」というわれわれ胆膵内視鏡医にとってのバイブルのような名著がすでに出版されており、著者のような若輩が新しい参考書を作成することはいかがなものかと思い、お返事を保留させていただき、糸井先生にご相談をさせていただいた。すると糸井先生からは「そのように声をかけていただけることはとても名誉なことであるし、ぜひやるべき」と激励のお言葉をいただいた。さらに「本当に伝えたいことを伝えるためにはできるだけ多くのパートを自分自身の言葉で書くべき」と、結果的に本書の最も大きな特徴につながるご助言もいただき、背中を押される形で本書の作成にチャレンジさせていただくこととなった。

著者は2001年から'08年まで淀川キリスト教病院で医師としての基本を学んだ。多くの先生にご指導を受けたが、特に指導医になっていた渡辺明彦先生にはお世辞にも優秀とは言えない思い返しても根拠のない自信をもとに生きていた私の鼻を何度もへし折っていただいた。そして当時の消化器内科部長であった師 向井秀一先生に出会えたことが私の消化器内科医としての最初の幸運であった。1980年代から故・川井啓市先生を中心に日本の胆膵内視鏡を牽引していた京都第二赤十字病院での胆膵内視鏡の技術や考え方を中島正継先生、藤本莊太郎先生から学ばれた向井先生から直接指導をいただけたのである。そして2009年からは神戸大学医学部附属病院消化器内科に勤務し故・東健教授にご指導をいただいたが、そこからの数年間、早雲孝信先生、久津見弘先生、岡部純弘先生、有坂好史先生、佐貫毅先生と多くの胆膵スペシャリストの先生方と仕事を一緒にさせていただけたことが2つ目の幸運であった。指導者が変われば言うことも変わる、皆少しずつ言っていることが違う、では何が真理なのか？と、同世代である塩見英之先生、増田充弘先生と議論を重ね、自分なりの胆膵内視鏡を構築していく日々は確実に私の財産となっている。

そして2016年に工藤正俊教授にお声がけをいただき現職の近畿大学病院消化器内科に胆膵責任者として赴任したことが私の医師人生において最も大きな出来事となった。移籍当時、近

畿大学消化器内科には北野雅之教授（現・和歌山県立医科大学内科学第二講座）が育てあげた若い先生が多く論文作成や学会報告を行っており、私に何ができるのかという思いで赴任したことを思い出す。ただ実際に一緒に働き出すと指導すべき点は多々あり、彼らもそれを快く受け入れてくれた。ところが頭ごなしに指導しても、“なるほど”と思わなければ納得してくれない。そこで今まで以上に、どうすればわかってもらえるか、どうやって納得してもらえるかを連日考えることになったことがまた大きな幸運であった。結果、本書でも紹介しているCompact Disc methodやDrawing picture method、ESTはゲーチョキパー、chasing methodといった新しい教育法を生み出したが、これらは著者一人ではなく彼らがいてくれたので作り上げられたと思っている。多忙な中、臨床、研究に真摯に取り組み胆膵チームとして一丸となってともに歩いてくれている彼らに心より感謝の意を表したい。そしてこれらの指導法は、日本全国はもとより海外で講演をさせていただく際にも多くの支持をいただけていることが、少しは有益性があるものを生み出せた、と自負している。本書ではそれらを余すことなく解説している。ぜひ日々の参考にしていただければと願う。

本書では第2・3章のERCPパートに関しては私が主に執筆を行い、第4章のEUSパートに関しては全国の同世代の先生方に執筆いただいた。EROH10グループという名のもと、頻回に会い、悩みを打ち明け合い、励まし合う仲間、というよりは大切な友人とも呼べる彼らがいなければ本書の完成はもとより今の自分は存在しえなかつた。また常日頃より多くのご指導ご鞭撻をいただいている北野雅之先生、安田一朗先生、入澤篤志先生、良沢昭銘先生、渴沼朗生先生、伊佐山浩通先生、岡部義信先生、中井陽介先生には大変お忙しいなかコラムの執筆いただき、本書に大きな厚みを与えていただいた。また紙幅の都合でお名前を出すことが叶わないが、常日頃より多くのご指導をいただけている全国の先生方との“ご縁”が私にとって最大の幸運であり、改めてここに感謝の意を表したい。

本書の内容はこれまでとは少し切り口が違う視点で書かれている部分が多いが、それは執筆者らがどうにかしてもっとわかりやすく、と考え抜かれた結果である。動画に関してはその視点で作製されており、本書を手にした読者の日頃もやもやしている疑問の解決につながり、「これで完璧！」と日々の胆膵内視鏡検査で思えるようになるための一助として役立てていただければ著者にとっては望外の喜びである。

最後に新型コロナ感染症の出現や著者の力量不足により、お話をいただいてから2年を要してしまった本書刊行にあたり、終始一貫激励をいただいた羊土社 鈴木美奈子女史、森悠美女史にこの場を借りて深謝したい。

2021年10月 大阪狭山市にて

近畿大学病院消化器内科
竹中 完